

読書推進運動

公益社団法人
読書推進運動協議会

〒101-0051
東京都千代田区神田神保町1-32
出版クラブビル6階
TEL 03(5244)5270
FAX 03(5244)5271

発行人 宮本 久
編集人 片岡 伸子

定価 60円 会員の購読料は
会費の中に含まれる

No.614

★野間読書推進賞 受賞者の活動報告 (5頁)
★「こどもの読書週間」「読書週間」標語決定 (8頁)



年頭所感

「分断」を超える力 読書で育む

公益社団法人 読書推進運動協議会 副会長
日本出版販売株式会社 代表取締役社長

ひらばやし
平林 彰
あきら

あけましておめでとうござ
います。

平素より読書推進運動協
会の活動に多大なるご支
援・ご協力を賜り、厚く御礼申
上げます。

昨年2018年は、4月の
南北首脳会談、そして6月の
米朝首脳会談と、歴史的な融
和の瞬間が訪れた年でありま
した。しかし、それと同時に、
難民問題や経済格差といった
問題にはいまだ解決の途が見
出せず、社会全体が「分断」
の空気に覆われてしまったか
のような、いつそうの不安を
覚える年でもあったように思
います。このままでは、平和
や文化振興を目指す国際的な
気運さえ次第に萎縮し、私た
ちの生きるこの時代が「分断
の世紀」として後世に記憶さ

れてしまうのではないかと、
危惧しています。

しかし、そのような「分断」
の時代にあっても、本はけし
て無力ではありません。むし
ろ、本を読むことが「分断」を
超える力を養うことにつなが
りうると、私は考えています。

人と人との間に差別や排除、
無関心などによる「分断」が生
じるとき、その奥底にあるの
は、相手に対する理解力や想
像力の欠如です。これを克服す
るためには、他者の声に耳を傾
け、相手の心の中を知ろうとす
る姿勢を、幼少期から身につけ
ておくことが不可欠です。

その一端を、まさに読書が担
うことができるのではないで
しょうか。一冊の本を通して、
自分とは異なる他者の思考を
知り、共感したり反発したり

しながら、自らの思考を刷新さ
せていく。あるいは、未知の領
域へと自ら足を踏み入れ、視野
を広げる。その繰り返しによつ
て培われた伸びやかな発想力
や想像力は、現実社会におい
ても、発揮されるはずで

また、たしかに知識を身に
つけ、自らのうちに蓄積して
いくこともまた、本を読むこ
との大きな意義であるといえ
ます。読売新聞社が毎年秋の
読書週間を前に実施している
全国世論調査によれば、「本
を読む理由」として最も多く
挙げられているのは「知識や
教養を深めるため」で、「面白
いから」や「趣味に生かすた
め」などを上回っています。

この傾向はここ10年間ほど続
いており、インターネットで
無数の情報を手に入れられる

時代にあっても、多くの人が
本から知識を得ようとしてい
ることがうかがえます。

これはひとえに、本に対す
る信頼の厚さとも言い換えら
れましょう。企画から編集、製
本、販売にいたるまで、多くの
人の手を経て精緻に磨かれて
いく、その過程への信頼です。
出版流通に携わる者として、
これからも人々の信頼と期待
に応え続けなければならな
い、身が引き締まる思いです。

今年2019年は、読書推
進運動協議会創立60周年の節
目の年にあたります。60年間、
全国各地で地道に行われてき
た活動の一つひとつが、「分
断」をも超えうる力を育み続
けてきたということを、あら
ためて思い起こしたいと思
います。それぞれの活動は小規
模でも、連携し継続すること
で、読書推進という大きな流
れを作ってきた、その歴史の
重さを忘れてはなりません。

「読書の力によって、平和な
文化国家を作ろう」「読書週
間」制定時の決意を、いまこそ
新たに心に刻むべきときです。

「2018年度読書推進運動協議会 全体事業委員会」

「読書週間」「こどもの読書週間」の公募体制や周年企画の検討・討議

2018年12月11日(火)、東京都千代田区出版クラブビルで公益社団法人 読書推進運動協議会の2018年度全体事業委員会が開催された。あわせて、2019年度の「第73回 読書週間」「第61回 こどもの読書週間」の標語選定事業委員会も開かれ、合計3000通を超える応募の中から討議・検討し決定した(標語選定事業委員会については、8ページに詳細)。

全体事業委員会では、2018年度の「読書週間」「こどもの読書週間」や「敬老の日読書のすすめ」「若い人に贈る読書のすすめ」のリーフレット、「野間読書推進賞」などの協議会の柱となる各事業について事務局から報告があった。

「読書週間」のポスターイラスト募集について、標語との親和性を考え標語選定をイラスト募集に先立って行うことにより一時減少したイラスト応募数も、公募サイトや美術専門学校などへの働きかけの強化により向上し、イラスト募

集先行時の応募数を上回るようになったことや、標語を十分に活かしたポスターが好評を得ていることより、今後も標語募集先行の公募体制の続行が確認された。また、2年つづけて参加した全国図書館大会での「第60回 こどもの読書週間記念」展示の内容や、9月末より調査票を配布し、11月より回答をいただいている、5年ごとの「全国読書グループ調査」の進捗などが報告された。

2018年の「第60回 こどもの読書週間」記念事業では、荒井良一さんに描き下ろしポスターイラストが発表された。



2018年「読書週間」「こどもの読書週間」ポスター



年々送付希望者が増えているリーフレット

ラストを依頼、あわせて描き下ろしイラストを使ったしおり80万枚を製作、全国の書店・図書館に配布したが、ポスター・しおりとも好評で、今後も「こどもの読書週間」ポスターは荒井良一さんのイラストを杉浦康平さんがデザインする従来のスタイルで依頼することが確認された。

また、2018年に調査し、集計・研究結果を編纂した『2018年度 全国読書グループ総覧』を2019年春以降に刊行する予定だが、2019年は読書推進運動協議会の創立60周年にあたるため、これに読書グループ研究や読書推進運動協議会60年の総括などの寄稿を追捕し、記念号とする方針などが説明され、各委員へ新年度の事業への協力をあおいだ。

「絵本ワールドinにいがた2018」

地元大学・ボランティアグループの協力によるワークショップが開催

2018年11月18日(日)、新潟県新潟市の朱鷺マッセで「絵本ワールドinにいがた2018」(主催「新潟日報社」が「福祉・介護・健康フェア」と同時に開催された。復活開催から4回連続の開催となった。

絵本作家のなばたとしたかさんのトークショーでは、「こびと研究家」として、さまざまなこびとの生態や特徴、性格別のこびととのつきあい方までを解説した。また、事前に募集した「いたらいいな、こんなこびと」を紹介、来場者からのこびとに関する質問にも

こたえた。こびと好きの子どもやおとなによる、専門的な疑問や意見がつきつきに出で、おおいに盛り上がった。

新潟市在住のイラストレーターあだちあさみさんのワークショップ「こねこねキャンドルづくり」、地元新潟県立大学の協力のもと、「紙コップでつくるキラキラ万華鏡」「毛糸と小枝のクリスマスカざり」「竹コロめいる工作」「紙ヒコキを作って飛ばそう!」などにワークショップが催された。さらに地元グループによる、左右にまわる二段かざぐるま、踊るはらぺこあおむし、平面キューブ、かんだんオーナメント、ぶんぶんごま、松ぼつくりのツリーなどの工作に子どもたちが取り組んだ。



地元のグループ・大学によるおはなし会やワークショップが多く行われた

ほかに、12の地元読書グループによる読み聞かせや紙芝居ライブなど昨年同様、活発に催された。

同時開催の「子どもの本大展示」では、3000冊の絵本・児童書を展示販売。来場者の親子がお気に入りの1冊を求めて集まった。

■「絵本ワールドinわかやま2018」

絵本作家が近隣施設を巻き込んで 講演やライブイベントに大活躍！

2018年11月10日(土)、11日(日)和歌山県有田郡の有田川町地域交流センターALECで「絵本ワールドinわかやま2018」(主催 絵本まちづくり協会)が、「えほんマルシェ」「えほんdeわっしょい」と同時開催された。

有田川町を絵本の町として活性化しようとしてスタートしたこれらのイベントは絵本作家の講演会、ワークショップ、サイン会と、絵本の展示販売や地元の人気飲食店や小物ショップ約20店以上がテント出展する「えほんマルシェ」が共同で開催されており、和歌山市



ズラリとならんだ絵本・児童書を手取る人々たち

や大阪市内から来たリピーターをふくめ、朝一番から入場待ちの長い行列ができた。

参加した絵本作家は、「有田川町絵本コンクール」の審査員でもある宮西達也さん、tupera tuperaの亀山達矢さんと中川敦子さんをはじめ9人。恒例のメイン会場のALECのガラス壁面へのライブイベントのほかに、昨年につづき旧有田川鉄道御霊駅の駅舎にも絵本作家の真珠まりこさん、武田美穂さん、町田尚子さんによるライブイベントが行われた。

10日は宮本えつよしさんのワークショップ「絵本のキャラクターに変身★」。会場の子どもたちには、ビニール袋などを使って親子で作った、なりきりコスチュームで変身を楽しんだ。また、宮西達也さん、武田美穂さんによる「おはなしマラソン特別編」と題した読み聞かせの会が、近隣の施設金屋図書館・ちいさな駅美術館などで行われた。

12日はよしながこうたくさんの「絵本ライブ」。会場の子ども



ステージに勢ぞろいした参加絵本作家のみなさん

たちのリクエストにこたえてオリジナルのイラストが即興で描かれた。tupera tuperaのおふたりの「おはなし会」では、『やさいざん』を「すっぽーん」のせりふを来場者といっしょに声をあわせて読み聞かせ。宮西達也さん「トークショー」では『おまえうまそうだな』の読み聞かせと、2019年公開の新作アニメの一部が披露され、制作秘話なども語られた。

また、会場では両日を通じて山本孝さんのワークショップ「突撃！アプナイおふろやさん」が行われ、来場の子どもたちは、絵本の世界を体感した。

参加絵本作家の講演会のあとにはサイン会が開催され、来場の親子がお気に入りの絵本を手を長い行列を作った。

■「絵本ワールドinみえ2018」

地元密着の伝統文化継承の祭りとして 読書推進イベントが合体

2018年11月3日(祝)、三重県津市の地元活性化イベントとしてなじみの深い高虎楽座の一角で「わくわくえほんひろば」と題して、日本児童図書出版協会、子ども読書推進会議などが参加した「絵本ワールドinみえ2018」が開催された。

「子どもの本・大展示」には2000冊以上の絵本が大集合。来場者はゆつくり絵本を見て、お気に入りの1冊を探した。また日本児童図書出版協会の協力で行われたワークショップでは、子どもたちが絵本のカバーを使ったエコ



屋外テントでの「子どもの本・大展示」

バッグ作りに挑戦。参加者はあわせて、お絵かきも楽しんだ。JPIC読書アドバイザークラブ東海支部協力の読み聞かせイベントでは、参加の子どもたちは「うんこダスマンたいそう」や「もったいないばあさん音頭」などで体も動かして楽しいひとときをすごした。

伝統文化の保存・継承と地域の活性化をめざして年2回行われている高虎楽座は今回で54回。地元になじんだイベントだが、近隣の子どもたちを楽しんでもらおうという趣旨から「わくわくえほんひろば」は生まれた。実行委員会は今後の継続をめざしている。

2000年の子ども読書年からスタートし、子どもたちに向けた読書推進運動として全国で開催されてきた「絵本ワールド」。今回の三重県津市でははじめ、徳島県阿南市や兵庫県神戸市などでも開催が模索されている。初年度の開催にあたっては、子どもの読書推進会議から初回開催協賛金が援助される。

■角野栄子さん「国際アンデルセン賞受賞記念講演会」

想像力と好奇心をかきたてる 物語を子どもたちへ

2018年12月6日(木)、東京都中央区の浜離宮朝日ホールで「国際アンデルセン賞受賞記念 角野栄子さん講演会(主催)日本国際児童図書評議会(角野栄子)／朝日新聞社」が行われた。講演のタイトルは「魔法が生まれるところ」。

冒頭、角野さんは、受賞の喜びと受賞までのJBYのサポートへの感謝を述べ、ギリシャアテネでの受賞スピーチでは「日本語の響きを伝えたい」と、オノマトペを取り入れたことを紹介した。

幼いころより、海の泡など遠くから運ばれてくることばと音に関



「魔女からの手紙」を紹介、朗読する角野栄子さん

心があった角野さんは、遠いところへ行きたいとブラジルへ移住。2か月の船旅で毎日水平線をながめ、「あそこからなにが出てくるんだろう」とワクワクしていたことから、「想像力と好奇心は人を強くする、元気にする」「本は扉。本を読んでいるとページごとに水平線が生まれてくる。読んでくれる人の数だけ物語がある」と述べた。

また、子どもを読書に誘うために、「1冊の本を終わりで読めないというストレスは、子どもに多い。自分で読む本、幼年童話がおもしろくないと、子どもは本を読んでもくれない」と、幼年童話の大切さを紹介。「人生の節目に、3冊ぐらい入る本棚を贈ってほしい。本棚はその人のすばらしさを見せてくれる。その人の辞書です」と提案もした。

終わりに『魔女からの手紙』より、長新太さんの絵に触発されて書いた『おわりのばあさんより』を朗読。「この受賞で、終わりの扉がまた開きました」と、さらなる創作活動への思いを語った。

■「ながさき子ども読書活動推進地区フォーラム」

地域特性を生かした分散型開催、 講演とグループ討議の実践演習

平成30年度の文部科学省子ども読書活動推進「読書コミュニティ拠点形成支援」の委託事業として、2018年11月20日(火)、長崎県東彼杵郡の川棚町中央公民館でながさき子ども読書活動推進地区フォーラム「東彼杵郡みんなつながる読書ネットワーク講座」が開催された。

文科省では、長崎県の地域特性を生かし、吉崎市・平戸市・川棚町の3か所に分散してのフォーラムの開催を委託。各会場での講演とグループ討議を中心に、実践研修での成果をめざした。

川棚町では、児童文学研究者の二羽志裕さんが「子ども読書ネットワーク構築を目指して」と題して講演。図書館司書や読書グループメンバーにむけ、読書環境の構築のための選書から図書の手渡し方まで実践的な講義が行われた。



グループ別の討議では、活発な意見交換が行われた

■「日本YA作家クラブ」ニュースレター発行

YAの作り手・読み手・届け手の 情報ができました！

ヤングアダルト(YA) 作家の作家と翻訳家の有志による「日本YA作家クラブ」は、同クラブとYAということば・概念をより知ってもらい、ウェブサイトで「日本YA作家クラブ」への案内を目的としたニュースレターを、この1月に発行した。対象は、公共図書館・学校図書館のスタッフや教育・福祉関係者、書店員など本に関わりのあり、子どもや若い人たちがYA図書にふれる環境を整備できる立場にいる人が中心。

第1号では、「作家・翻訳家のお気に入り調査隊」に宮下恵菜さんと原田勝さんが登場。YAやYAの読書活動を応援するグループを紹介する「YA読書応援団」では、視覚障がいのある無関係なくYA図書の楽しみを共有する読書サークル「バリアフリー読書サークルYAクラブ」を取りあげている。



ニュースレター表紙イラストも募集！

第2号の発行は、2019年夏ごろを予定。ニュースレターは寄付で作成・配布しており、同クラブでは購読登録者と協力者を募っている。また、図書館・学校図書館の担当者、YAを扱う書店、読書活動に関する勉強会・連絡会などでの配布協力も募集している。詳しくは同クラブサイトをご覧ください。

野間読書推進賞受賞者の活動報告

おとなのための絵本講座
ゆったりと、優しい時間を過ごしませんか？

第44回野間読書推進賞個人の一部(群馬県高崎市) 寺澤 敬子

ひとりでも多くの子どもが絵本に楽しく出会ってほしいとはじめた読み聞かせ活動が、しだいに、子育て中のお母さんや読み聞かせボランティアの方々への講演活動に発展し、30数年が経ちました。

ふと気がつくとも私も人生の後半にさしかかり、自分自身のために絵本を開くことも多くなりました。ページをめくると、そこには懐かしい日だまりが広がっているようです。慰められたり癒やされたり、思わず微笑んだり、また新



小児科医院での読み聞かせ。ここで「おとなのための絵本講座」を開催

しい発見があったりと。

このようならずばらしい絵本の魅力と読んでもらう心地よさを届けたい—それもいままでも絵本とあまり縁がなかった方や年配の方に、そして、この目まぐるしい社会のなかで息苦しさや疲れを感じている方にも。こんな思いで、「おとなのための絵本講座」を開きました。

第一回は「語る楽しさ 聴く楽しさ」として、絵本『フレデリック』(レオ・レオニ作)、『くまやまねこ』(湯本香樹美文/酒井駒子絵)の読み聞かせと、『掌の小説 ありがとう』(川端康成作)の朗読を行い、その後、絵本についてのおはなしになりました。

会場は休診日の小児科医院の待合室。医院からの依頼で、赤ちゃんとお母さんを対象に、毎年5月に絵本の読み聞かせとミニ絵本講座を行ってきた場所です。

レースのカーテンからやわらかい日の光が注ぐ円形の待合室は、木のぬくもりにあふれています。20名ほどがゆったり座れるその空

間は、読み手と聞き手が絵本を仲立ちにして心を通いあわせるのに

びつたり。医院スタッフの協力で、ぬいぐるみでかわいく飾られた受付カウンターには暗幕を張り、小さな舞台を作りました。

集まった21人(うち男性7人)の多くは子育てを卒業した方々。くつろいだ表情で、ときどきうなづきながら聞いてくれました。読み進むうち、私の目の前に物語の森が広がり、川のせせらぎも聞こえます。赤く色づいた山の秋の冷たい風も感じます。まるで聞いているみなさんと同じ小舟に乗って、物語の小さな旅をしているようでした。

何度となく読み返したストーリーにもかかわらず、この新鮮な感覚はなんなのでしょう。私の思いと21人のみなさんの思いが重なって、物語が幾層にも深まったからかもしれません。読み手と聞き手が共鳴しあったそのときに、作品のすばらしさが立ちあがるのです。読み聞かせや朗読は、読み手と聞き手が一緒に作りあげるも

のだとあらためて感じました。朗読のあと、何人かの方が感想をよせてくださいました。

●絵本などに縁のなかった戦後育ちの大人にとって、いま、絵本を聴くことは、ある意味、私が体験できなかった幼児期をもらっているのかもかもしれません。あの時間、あの部屋の優しい温かな雰囲気がいまも続いています。

●温かくて、優しく、楽しく、とても気持ちがあがりました。朗読を聴くって、おはなしが心に届くということだと知った気がします。

●やわらかく流れる声を聞きながら、力強さは必要なく、絵本の世界を伝える思いが大事と知らされました。

●『くまやまねこ』は涙があふれそうでした。寺澤さんの声なのに、幼いころ毎日枕をしておはなしを語ってくれた父の声が聞こえ、父に抱かれているような不思議な感覚でした。

●身体障がいがありデイサービスに通所している者です。私より重度のみなさんに、私を感じた流れるような心地よさを感じさせてあげたいと思いました。

●幾度も幾度も読み込んで、すっかり読み手の声となった絵本のことはなんと心地よいのだろう。



「昔こどもだったおとなへ」呼びかける手づくりのチラシ

母の介護やらで疲れていた私が、すっかり癒やされて帰りました。

●絵本の文章は、すべてを語っているわけではない。かならず、余白がある。そして、絵本の絵は、文章で語れない多くを語っている。絵本は、文章と絵がたがいに補いあい、響きあっているということを知って驚かされました。これから絵本を読むときには、絵をじっくり読み返して楽しんでみようと思います。

みなさんの笑顔が私の喜びとなり、生きる力にもなりました。絵本の力と生の声の力を感じるこの講座を、年4回ほどのペースで開いていきたいと思っています。読んでもらった喜びを、つぎの世代に届けること—それが私の願いであり、この講座の目的のひとつでもあるからです。

優良読書グループの歩み (1)

2018年度の「読書週間」に際して道府県読書推進運動協議会より推薦され、本会において表彰した全国の優良読書グループの活動報告を掲載いたします。
(順不同)

家庭教育応援ボランティア活動団体 アベルんち

代表者 佐藤 成美

山形県新庄市

〈推薦〉

山形県読書推進運動協議会

「アベルんち」が生れたのは2011年、東日本大震災がおきて少したからのこと。なにかしなくては、と夫とふたりで社会福祉協議会にボランティアを申し込んだときです。「グループ名は？」と聞かれ、地域のみなさんにかわいがられているわが家の愛犬から名付けました。

新庄・最上は以前より読書活動がさかんで、小学校はもちろん中学校にも読み聞かせグループがあります。私自身、複数のグループに混ぜてもらい、楽しく活動させてもらっていました。

その絵本仲間のつぶやきからアベルんちで絵本の紹介をしあう茶話会が生れたのは2013年。

月に一度、テーマにそった絵本を持ちよつてのブックトークがはじまりました。ルールは「どなたもどうぞ」「参加費ではなくカンパ100円：いつかなかをすするため」メンバーにバステル画の先生

がいたので、「教えて！」という声があがり、月1回のバステル教室が生れました。エコクラフトでかごを作りたい、羊毛フェルトでバッグを作りたい、自分たちで絵本を作るのはどうだろう、お出かけもしたいねなどなど、つぎつぎに楽しい提案が出されました。幸運なことに喜んで教えてくださる方たちに恵まれ、夢はどんどん実現していきました。いつの間にか幼稚園や児童養護施設で読み聞かせもしていました。そして仲間一人ひとりがますます元気いっぱいになっていきました。

そんなみんなの姿を見ているうち、「お母さんが笑顔で元気にすることがその家庭を笑顔にし、元気にすることにつながる」という思いにいたりしました。そして、発

達障がいや不登校など子育てで辛い思いをしているお母さん方の心を軽くする手伝いもできたいいなと、相談していました。

2016年、名前を「家庭教育応援・ボランティア活動団体アベルんち」とあらため、荘内銀行のふるさと創造基金をいただくことになり、カンパで集まったお金をもとに3つの活動「親子で楽しむ朗読会」「みんなで作ろう一冊の絵本」「花輪先生を囲んで語ろう」を展開することができました。広報担当・相談役・講師を快く引き受けてくれる仲間と笑顔いっぱい仲間とで、つぎはなにをしようかとわくわくしながら活動を続けていきます。



わくわくしながら活動を広げてきました

図書修理の会

代表者 三村 佳子

茨城県牛久市

〈推薦〉

茨城県読書推進運動協議会

図書修理の会は、1990年、まだ牛久町立図書館だったころに山川輝男氏がたつたひとりでご自分の修理道具を持ち込んだことからはじまりました。山川氏は独学で修理を学び、図書館に通う近所の主婦に修理を教えました。

やがて、牛久市立中央図書館が建てられ、1993年4月に開館すると、作業室の片隅で山川氏と2〜3人が修理をはじめました。山川氏のお人柄にひかれ、製本教室の仲間や読書好きの人が集まりました。

現在は、山川氏は病氣療養中ですが、12名が視聴覚室で毎週水曜日の午前9時から12時まで、図書館の本、市内小中学校の壊れた本の修理をしています。

図書館長、司書の方々も細かく心を配ってください、折にふれて不足の修理用品はないか、たずねてください。また、作業用のエプロンも提供いただきました。

ひどい壊れ方をしている本や、とび出すしかけ絵本など修理が難しい本は相談し、知恵を出しあいながら生まれ変わらせています。会員のみなさんは話題豊富で、博識の方や経験豊富な方が多いので、おしゃべりしながら作業するのもそれはそれは楽しいです。毎週修理した30冊近くの本が、びかびかに輝いてならんでいるのを見ると、とてもいい気持ちです。

会員は70代が中心で、おのこの身体の故障も出てきますが、無理せず続けていきたいと思います。

岩出図書館ボランティアおはなしドロップス

代表者 安居 仁美

和歌山県岩出市

〈推薦〉

和歌山県読書推進運動協議会

2006年、岩出図書館開館にあわせて「読み聞かせボランティア養成講座」が開催されました。その受講生の有志で「ドロップス（いろいろな味わいがあるという意味）」という名で読み聞かせグループを結成しました。「岩出市の子どもたちの心を健やかに豊かにしよつ」をスローガンに、多少の入れ替わりや新規加入のメン

バーを迎えながら、ほとんど結成当初からのメンバーで12年間、現在14名で活動を続けています。

図書館が所蔵する絵本に親んでもらいたいという思いを大切に、岩出図書館で毎月第1、第2日曜日に開催しているおはなし会を中心に、2班にわかれて活動しています。そのほか、子育て支援センターのおはなし会や、岩出市内の小学校での始業前の読み聞かせ、学童保育所でのおはなし会など、年々活動の範囲も広がってきました。

歌、楽器演奏、絵を描く、手芸など、特技を持った人が多いので、読み聞かせの活動だけにとどまらず、おはなし会のPR看板を季節ごとに作成したり、牛乳パックを使ったくるくる絵本の作り方講座の講師をすることもあります。また、岩出市子ども読書の日にあわせた図書館まつりで主催する「むかしむかしのおはなし」では、歌や楽器演奏も交えた多彩なプログラムを楽しんでもらっています。図書館ボランティア代表として、岩出市図書館協議会委員を委嘱され、よりよい図書館運営のために尽力しているメンバーや、岩出市子ども読書活動推進会議委員として岩出市の子どもの読書活動



「むかしむかしのおはなし」は多彩なプログラムで実施

の推進に協力しているメンバーもいます。

読み聞かせに関する技術や知識の向上のため、毎月1回、学習会を開き、講師を招いて、講義や実践を通しての指導を受け、研鑽しながら、メンバー間の情報の交換・共有の場としています。

活動をはじめて10年以上がたち、継続的に読み聞かせを行っている、以前より子どもたちの聞く力がついてきているように感じます。町で会った子どもに「おはなし会のおばちゃん」と声をかけてもらったり、おはなし会の参加者が読み聞かせにおもしろい本を紹介してくれたり、たくさんの方と思いがけない交流が生まれる

のも、活動を続ける醍醐味です。これからも、読み聞かせや紙芝居、語り、エプロンシアター、パネルシアターなど、絵本を多様な形で伝えていき、さまざまな手法を取り入れて、変化があつて退屈しないおはなし会開催のために、メンバー全員、意欲的に活動していきたいと思っています。

おはなしだからばこ

代表者 木島由美子

長崎県佐世保市

〈推薦〉
長崎県読書推進運動協議会

「おはなしだからばこ」は佐世保市立図書館を拠点とし、子どもの読書活動を推進することを目的に2010年7月に結成されました。子どもと本を結びつける人材の育成のために、図書館で開催された「読書ボランティア養成講座」を受講した有志で構成されています。グループ名は「宝箱の中の宝石のようにキラキラとしたおはなしを子どもたちに届けたい」との思いからメンバーで決めました。毎月2回、図書館の児童室、おはなしの部屋で幼児から小学生を対象におはなし会を開催していま



大好きな本と大好きな子どもが出会う場所を提供して

す。絵本の読み語りを中心に、手遊び、わらべ歌、いろいろな道具を使つての人形劇など、趣向をこらした幅広い内容でプログラムを作成し、楽しんでいただいています。そのほか、公民館や保育園、病院などでも定期的に年齢層にあわせておはなし会を開催しています。

結成から早いもので来年は10周年を迎えます。長い年月を振り返りあらためて思うのは、おはなし会を終えて「楽しかったよ」と笑顔で会場をあとにする方々への感謝です。それはいまの私たちの活動を支える大きな糧となつています。

の仲間です。活動を通して信頼関係は徐々に深まり、深い絆も育まれました。週に一度の定例会で、予定表の確認・選書・プログラム作成・つぎのおはなし会の準備などを自主的に行っています。また、自己啓発として、各種講演会や研修会にも積極的に参加。ほかのボランティアグループの実技の見学にいくなどのスキル向上のための取り組みも行っています。

読み語りは幼い子どもにとつて本に興味を持つてもらおう小さな入口と考えます。また文字の読めない子は澄んだ目と耳と心で絵を追いかけるながら、目の前に広がる絵本の世界に見入っています。一人ひとり違う感性で、ワクワク・ドキドキしながらどんな想像の世界を創っているのでしょうか。未来を生きるこの子らにとつて、おはなし会の会場が楽しく温もりのある思い出の場所であつてほしいと願っています。心豊かに本が大好きな子どもに成長してくれることを願い、キラキラとした楽しい絵本をやわらかな声と笑顔で紹介していきたいと思えます。

結成当初より活動を温かく支え、ご指導いただいた佐世保市立図書館のみなさまに、心より感謝申し上げます。



標語決定!



2019 第61回 「こどもの読書週間」 ドは読書のド♪

2019 第73回 「読書週間」 おかえり、葉の場所で待ってるよ

2018年12月11日(火)、公益社団法人 読書推進運動協議会の「こどもの読書週間」および「読書週間」標語選定事業委員会(出席19名)が開催され、「2019 第61回 こどもの読書週間」と「2019 第73回 読書週間」の標語が決定しました。

今回も4月の「読書週間」ポスターイラスト募集時に標語を明示するため、「こどもの読書週間」

標語募集と同時に「読書週間」の標語も募集、決定しました。ご応募されたみなさん、社内の応募作をとりまごめいただいた会員各社の担当者のみなさん、ありがとうございました。

第61回「こどもの読書週間」標語の応募総数は、一般・会員各社あわせて1740点。うち501点を選考対象としました。第73回「読書週間」標語の応募総数は2084点。うち553点が選考対象となりました。選定委員会では「こどもの読書週間」標語「読書週間」標語の順で協議。どちらも、事業委員による数回の投票で作品を絞り、推薦の弁などを加えて、最終的に各委員の一票投票によって、入選作品を決定しました。

「こどもの読書週間」標語に決まった「ドは読書のド♪」は、「読書週間」とあわせて、はじめての感嘆符・疑問符以外の記号が入った標語となります。

■第61回 こどもの読書週間 標語
入選(図書カード1万円) 1点
ドは読書のド♪

■次点(図書カード5千円) 2点
これ読んで君の笑顔は世界一
落合 正子さん(トーハン)
出版進行!本のたひ
沢田 真紀さん(トーハン)

■第73回 読書週間 標語
入選(図書カード1万円) 1点
おかえり、
葉の場所で待ってるよ

■次点(図書カード5千円) 2点
お気に入りの一冊と過ごす、
私だけの時間
野田 香織さん(日販)

■佳作(図書カード2千円) 18点
大好きな本を、大好きな人へ
やっばり本が好き。 ほか

事務局報告(12月)

- 4日「絵本ワールドinにいがた」について新潟日報社と打ちあわせ
- 6日「JBBY」角野栄子さん「国際ファンデルゼン賞受賞記念講演会」出席
- ☆10日「機関誌「読書推進運動」(613号)入稿
- ☆11日「機関誌「読書推進運動」(613号)校了
- ☆11日「2018年度 全体事業委員会」および「第61回 こどもの読書週間標語選定事業委員会」、「第73回 読書週間標語選定事業委員会」開催
- 12日「上野の森親子ブックフェスタ」運営委員会に出席
- 12日「上野の森親子ブックフェスタ」について日本書籍出版協会、日本図書普及と打ちあわせ
- 12日「日本書店商業組合連合会」出版販売年末懇親会に出席
- 13日「造本装幀コンクール実行委員会」に出席
- 13日「日本児童図書出版協会年末感謝の会」に出席
- 14日「よたかすひこ氏より、次年度「子ども読書の日」ポスターイラスト受け取り
- ☆14日「機関誌「読書推進運動」(613号)発行
- 17日「子ども読書の日」ポスターについて「フラス・アイと打ちあわせ
- 18日「上野の森親子ブックフェスタ」について日本児童教育振興財団と打ちあわせ
- 18日「日本書籍出版協会「軽減税率専門委員会」に出席
- 19日「講談社社長室」に出席
- ☆21日「次年度 こどもの読書週間」ポスターについて杉浦康平事務所と打ちあわせ
- 26日「図書館を使った調べる学習審査会」に出席
- 27日「上野の森親子ブックフェスタ」について図書印刷と打ちあわせ
- 27日「子ども読書の日」ポスターについてよたかすひこ氏と打ちあわせ

編集部 & 事務局の ひ・と・こ・と

●あけましておめでとうございませう。本年もよろしくお願ひ申しあげます。

●4ページで紹介した「日本YA作家クラブ」ニューズレターは、クラブ世話人の梨屋アリエスさんからいただきました。梨屋さんからの封書には、読み方からして謎めいた「すんくSNSの会」の冊子もありました。表紙をよく見ると、「SUZUKI」の文字。「大人も知りたい、すんく児童文庫 教えます」の略称で「すんくIIすじこ」だったので。

●「すんくSNSの会」(<https://jido bunko.wixsite.com/index>)は、SNSでつながった児童文庫が大好きな大人と学生が、おすすり作品を自由に紹介するフリーペーパー(冊子)。「大人も知りたい、すんく児童文庫 教えます」を作って配る大作戦を展開中。その記念すべき第1巻です。紹介されている22冊は、名作エンターテイメントだけでなく、シリアスなテーマの作品やスポーツノンフィクションなど多彩な内容。紹介者も、図書館司書、書店員、学生、書評家、作家など、フロアマ混在。児童文庫の幅広さを、あらためて感じました。子どもも、おこづかいでも買いやすい児童文庫で、私は多くの物語に出会ったものです。

●「すんく」は子どもに本を手渡す立場にある大人に無料で配布していますが、部数、送料負担などに限界があるため、寄付や配布のお手伝い、執筆など応援してくれる人を大募集しているとのこと。興味のある方はぜひ!

(伸)